

今こそ 生活科学の出番です

大阪市立大学生活科学部同窓会事務局
TEL/FAX:06-6605-2804
e-mail:seika@osaka-cu.com <http://www.osaka-cu.net/seika/>
生活科学部同窓会 検索

GREETING ご挨拶



生活科学部同窓会会長
岸本 幸臣

今年の夏は殊の外厳しい暑さが続きましたが、会員の皆様には無事お過ごしでしたでしょうか、お見舞い申し上げます。併せて、皆様には日頃より同窓会の諸活動にご理解とご支援を賜り、心からお礼申し上げます。

既にご承知の諸兄姉も多いかと思いますが、昨年(2012年11月3日)大阪市立大学に全学同窓会が成立致しました。1949年に総合大学として発足して以来、63年にして実現したことになります。これまでも、各学部同窓会(文系学部は友恒会)は同窓会連絡会を組織して、母校への支援活動を担ってきましたが、ようやく全学的同窓会が機能することになった意義は大きいと言えます。これまでも各学部の同窓会に支部的取り組みが無かったわけではありませんが、所在地や活動内容が恣意的で個別散在的でした。唯一、文系学部同窓会の統一組織である友恒会の支部組織が、大阪市立大学の卒業生を学部を超えて結集させる機能を代行してくれていました。今後はこれまでの友恒会支部組織を継承発展させる中で、全国に市立大学卒業生の同窓会組織が確立されてゆくことになると思います。

全学同窓会は、大学全体に対する同窓会機能を担うこととなりますが、従来の学部同窓会は、各々の成立過程や専門分野の独自性による活動内容の違いを継承しながら、従来通りの活動を展開することとなります。このため、生活科学部同窓会にあっても、学部・研究科卒業生の連携と親睦を強化し、また在学生のキャリア形成への助言・支援活動等の魅力化への取り組みを一層強化してゆきたいと思っています。

近年各大学は、自らの教育・研究の発展と充実のために、地域や同窓会と言った利害関係者(ステークホルダー)との連携を深めることが求められています。その意味では、これからの市立大学の発展に当たって、同窓会が果たす役割と機能には大きなものがあります。勿論、会員相互の「親睦」は同窓会の第一義的な機能ですから、そのためのネットワークの確立と、情報共有の取り組みが大切だと思っています。それに加えて、社会や時代が求める同窓会の役割にも適格に応えてゆく必要があります。

生活科学部は、戦後我が国の家政学・生活科学における新しい研究教育の拠点として、指導的役割を担ってきました。この学部で学んだ卒業生は既に12,000人を超えています。その一人一人が専門職として、或いは教育研究者として、更には一生活者として、時代を担い社会をリードしてきたのだと思います。その結果、社会にどんな貢献が出来たのか、生活をどう見つめてきたのか、その足跡の一つ一つを次代の若者達に伝えることも生活科学部同窓会の大切な使命のように思っています。皆様のご提案やご支援を頂きながら、生活科学部同窓会の魅力化と強化を図ってゆきたく思っています。

最後に、同窓会会員の皆様のご健勝とご多幸を祈念し、今後のご支援をお願いしご挨拶と致します。

EVENT イベント

HOME COMING DAY

2013年大阪市立大学生活科学部同窓会総会ならびに第12回ホームカミングデーの御案内

2013年11月3日(日・祝)皆様お誘い合わせてご参加下さい。総会当日は大学祭と全学同窓会連絡会が主催するホームカミングデーの開催中で、各種の催しが一日中大学内で行われています。ご参加をお待ちしております。



▼ 2013年 生活科学部同窓会総会

高原記念館学友ホール

10:00~10:40 総会

10:50~12:20 シンポジウム

「卒業生は今!~リレートーク~」

▼ 第13回ホームカミングデー

各種クラブのOB会や展示会 講演会などがあります

13:00~14:40 ホームカミングデー オープニング行事
学術情報総合センター 10階大会議室

15:00~16:00 居住環境学科卒業生交流会
生活科学部会議室

16:30~18:00 全学懇親パーティ
旧教養キャンパス北食堂/会費:2000円

※他、各学部同窓会 クラブ催し物がございます。

※詳細は大学ホームページをご覧ください。

同窓会事務システム についてのご案内

生活科学部同窓会への住所変更などの御連絡ならびにお問い合わせは、下記の連絡先をお願いいたします。なお、今後の生活科学部同窓会からの御連絡につきましては、同窓会ホームページを活用してまいります。ぜひ生活科学部のホームページをご覧ください。
<http://www.osaka-cu.net/seika/>

大阪市立大学生活科学部 同窓会事務局

TEL/FAX:06-6605-2804
E-Mail:seika@osaka-cu.com
<http://www.osaka-cu.net/seika/>





本学の歴史の転換点としての再編・統合問題

生活科学部長・生活科学研究科長

畠中 宗一

本学部・研究科は、生活科学のフロントランナーとしての誇りを持って前進してきました。平成23年秋の橋下市長の誕生以降、大阪市立大学と大阪府立大学の再編・統合を審議する新大学構想会議が設置され、平成24年7月24日に新大学構想会議からヒアリングを受けました。平成25年1月に出された新大学構想会議による提言により、大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類における社会福祉と本学生活科学部人間福祉学類の社会福祉、及び同学域総合リハビリテーション学類の管理栄養士の養成と本学食品栄養科学科の管理栄養士の養成が、それぞれ二重行政の指摘を受けました。また新大学では、新学域として「人間科学域」、大学院が「人間総合科学研究科」（いずれも仮称）が提案されました。その後、本年4月に新大学ビジョンが発表され、新大学推進会議の下で、検討部会が設置され、指摘を受けた二重行政について、これまで7回の検討部会を積み重ねてきました。

本学は、一貫して新学域及び新研究科の理念を、人間と生活と環境の相互作用の場面を切り口にして、人びとのウェルビーイング向上の条件を明らかにする人間生活環境に関わる学際的研究を志向する所として主張してきました

た。その理念に照らしてどのような学類や専攻が相応しいかを具体的に主張してきました。しかし、検討会議の現実には、まず人ありきであったり、現代システム学域という名称へのこだわりが先行し、新大学としてよりよいものを創っていくという理念とは程遠いものでした。現在、学長同士で決着を着ける段階に入っていますが、ぎりぎりの攻防が続けられています。

2つの公立大学が統合すると、巨大な公立大学が生まれます。大学統合は、より大学を進化・発展させるために行うことが目的であるべきです。統合の結果、大学の水準が低下したということがあってはなりません。われわれは、今回の大学統合は、2つの大学の発展にとって望ましいものであったと歴史的に評価されるものを創造していかなければいけないと思っています。歴史の大きな転換点に立たされている本学を、これまで同様、温かい眼差しで応援して戴ければと思います。

最後になりましたが、同窓生の皆様の益々の発展と幸せを祈念します。

学科近況報告 1

2013年度 食品栄養科学科主任

佐伯 茂

食品栄養科学科および大学院食・健康科学講座には、14名の常勤教員と5名の特任教員が在籍し、食品栄養科学の教育・研究を一丸となって推進している。常勤教員の内訳は、教授6名（小西、春木、西川、佐伯、羽生、由田）、准教授6名（上田、安井、市川、小島、古澤、金）、講師1名（福村）、助教1名（千須和）である。このうち、平成25年4月1日に、上田先生が講師から准教授に、千須和先生が特任助教から助教に昇進され、安井先生（前大阪大学医学部附属病院栄養マネジメント部副部長）が准教授として着任された。

特任教員の内訳は、特任助教2名（加藤、林）、特任助手3名（森本、細田、山本）である。加藤先生は、米国ミシガン大学の大学院を修了後、米国カリフォルニア州立ナバ病院に管理栄養士として勤務された経験があり、アメリカ栄養士会登録栄養士、アメリカ栄養サポート臨床士の資格を有している。前述の千須和先生は、豪州シドニー大学の大学院を修了されており、千須和先生と加藤先生は、当学部のグローバル人材育成の推進に、大きな役割を果たされると期待される。また、林先生は、羽生先生が主導されている大学院教育改革支援プログラム「地域ケアを担うPhD.臨床栄養師の養成」を今春修了して博士号を取得した若手研究者であり、羽生先生、安井先生と共に、臨床栄養学分野の教育・研究を推進すると期待されている。

一方、平成25年3月末に、曾根先生が退職されて名誉教授となられ、平成25年4月1日より、美作大学に教授として勤務され、現在も管理栄養士教育に携わられている。また、特任教授として長年ご指導を頂いた西成先生も退職され、平成25年4月1日より、湖北工業大学食品製薬学部の特別招聘教授として勤務され、食品科学研究を推進されている。

現在、大阪府立大学は、大阪府立大学との統合に関する協議を推進しており、食品栄養科学科は、大阪府立大学 地域保健学域 総合リハビリテーション学類 栄養療法学専攻との統合を検討している。当学科は、従来から、生命科学をはじめとする基礎的研究に立脚した基礎教育を推進し、食と栄養に関する諸問題の解決に包括的に取り組むことの出来る専門技術者、研究者、指導的立場を担う管理栄養士の養成を行っている。これらの教育・研究方針は今後も維持され、大阪府立大学との統合は、当学科の教育・研究を補完すると期待される。

学科近況報告 2

2013年度 居住環境学科主任

森 一彦

同窓生におかれましては、日頃より居住環境学科への支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

居住環境学科では、少子高齢化、環境共生、グローバル化など新しい時代の要請に向けて、これからの居住環境のあり方について学生・教員がいっしょになって日々取り組んでいます。特に近年は教育・研究の一貫として「豊崎長屋などの長屋再生」や「泉北ニュータウンなどの住宅地再生」などの地域プロジェクトを精力的に実施しています。これらの取り組みをとおして、従来の座学や学内演習では得られにくい、地域再生に求められる問題発見解決能力を身に付けた人材を育成するとともに、新しい都市居住のモデルの提示をすることにもつながっています。例年行っている居住環境デザインフォーラムは今年で10回目を迎え、4月19・20日に200名をこえる参加者をえて開催し、内藤廣東京大名誉教授と竹原義二先生との対談「住むことと暮らすこと」、学生の優秀作品の展示と発表・講評会を開催しました。その内容についても非常勤講師など外部委員のステークホルダーとして、教育プログラムの改善に生かしています。

2013年3月に竹原義二教授、谷直樹教授、井川憲男特任教授が退職され、後任に小伊藤亜希子先生と三浦研先生が教授に、生田英輔先生が講師に昇任され、福田美穂先生が准教授、クレイグ・ファーナム(Craig Farnham)先生が講師で着任されました。新しい教員スタッフの参加のもと全16名の教員で、これからの大きな変革にむけて日々研鑽する所存です。現在、3年後（平成28年度）の府大市大統合にむけて検討が進められており、2013年9月に発表された「新大学案(素案)」では、生活科学部居住環境学科は、人間科学域居住デザイン学類に移行することとなっています。今までの教育実績を基礎に、新しい時代に向けてのモデルチェンジが求められています。



府営住宅の福祉転用住戸の事例（泉北ニュータウン再生プロジェクトより）

学科近況報告 3

2013年度 人間福祉学科主任

要田 洋江

平成23年4月に生活科学研究科の大学院の枠組みが刷新され、2年が経過しました。その間の大きな変化として、平成24年3月には総合福祉科学コースの山縣文治先生が退職されました。長年、本学部・本学科を支えてこられた先生でしたので、柱を一つなくしたような喪失感がありますが、その一方で、総合福祉科学コースの岡田進一先生、所道彦先生が教授に昇格されました。さらに、今年の4月より、総合福祉科学コース、臨床心理学コースに合わせて4名の先生が新しく着任されました。総合福祉科学コースでは、野村恭代先生（准教授）、鶴浦直子先生（講師）、中島尚美先生（特任講師）が着任され、総合福祉学コースの4教育分野すべてに教員が配置され、大学院とともに教員の一層の充実が図られました。また、臨床心理学コースでは、後藤佳代子先生（講師）が着任されました。新旧交代のあった2年間でしたが、人間福祉学科の教員体制は15となり、研究教育のさらなる発展に向けて確固たる体制を整えることができました。

昨年度までの取り組みとして、総合福祉科学コースでは、平成23年10月に大阪市・シカゴ市社会福祉従事者研修・交流プログラムの一貫としてシカゴ市の代表団を受け入れ、教員・学生を含め両市の交流を深めました。そして、平成24年11月には、部会長校として第18回公立大学協会社会福祉系部会連絡会を開催しました。また、東日本震災を受け、本学が地域連携を目的として取り組んできた「いのちを守る都市づくり」に岩間伸之先生が参加し、平成25年3月16日に開催された地域防災フォーラムにおいては、「体験型ワークショップ」にブースを出展し好評をえました。臨床心理学コースでは、「児童・家庭相談所」において、大阪市民および近隣都市住民を対象とした心理相談を引き続き行うとともに、三船直子先生によるプロジェクトとして平成21年より取り組まれている「くれよん教室」において発達障害を有する幼児とその母親グループを対象とした支援を行っています。以上のように、各コースとも地域連携に関する活動に活発に取り組んでいます。

現在、本学のあり方をめぐってさまざまな議論等が行われておりますが、教員一同、これまで通り、誠実に研究教育に取り組んでいく所存です。今後とも、同窓会諸氏からの一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願いたします。



3月に退職して—

2013年3月退職/現:美作大学大学院生活科学研究科
曾根 良昭

2013年の3月末をもって約32年勤めた大阪市立大学・生活科学部を退職し、現在は美作大学の特任教授として週2日、高速バスを利用して大阪・津山を往復しております。市大を退職して今年の夏は猛暑ながら、久しぶりに余裕のある夏休みらしい夏休みを過ごしております。私が市立大学に勤め始めた(1981年)頃は7月10日頃から約2ヶ月間、夏休みでした。冷房設備の整っていない8月の研究室にいますと室温が30度を超え、頭がぼーっとしてとても大学に居ることはできませんでした。それからだんだんと冷房設備が整えられ、前期の終了が8月初めになり、引き続きオープンキャンパス、お盆休みが終わると大学院入試の準備と試験、研修期間とだんだん教員にとって夏休みという幸せな休み期間が短くなってきました。

長く書き続けている日記をみると1999年の9月12日から9月23日まで帆船アコガレで八丈島・大阪往復の11泊12日のセールトレーニングに行き、9月25日久しぶりに学校に行く ーと書いてあります。その頃はこんな夏休みが可能でした。しかし、今振り返るとここ10数年間は夏休みばかりでなく、毎日が忙しい日々でした。それはそれなりに充実した日々であって決して嫌なものではありませんでしたが、今年の夏休みのように、少し時間的・気分的な余裕があったならば私のような教員でも学生・院生の指導をもっとよくできたのではないかと考えてしまいます。そして現在、市大と府大の今後の合併に関する報道をみると、大学の先生方は今後ますます忙しくなりそうです。また学生・院生も就職活動でもっと切実に忙しくなるようです。そんな日常の中で来年の、いやこれから毎年“朝、蝉の声を聞き、昼、畳の上で昼寝をし、夕、うちわを扇いで夜空を観る”ゆったりした夏休みを楽しんで下さいと同窓生の皆様への私の便りといいたします。



生活科学研究科での教育・研究と社会貢献

2013年3月退職/現:大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)館長
谷 直樹

私は平成25年3月末で30年余り勤めた大阪市立大学を定年退職しました。在任中、住文化史や町並み保存を講義し、150人のゼミ生に卒業論文・修論論文・博士論文を指導しました。研究では、大阪都市住宅史の編集、都市居住や都市文化・都市祭礼の研究、近世城郭や京都御所の造営、大工頭中井家の研究など、大阪を中心に京都や堺に関する研究分野を開拓することができました。一方、大学運営では平成14年から2年間研究科長・学部長を務め、平成18年から4年間は大阪市立大学文化交流センター所長として市大の社会貢献に携わりました。

在任中、とくに思い出に残っていることが二つあります。一つは、平成13年に開館した大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)の館長を兼任したことです。このミュージアムは、平成3年から10年の歳月をかけて開館準備をしたもので、展示設計には大阪市大の教員の方々に参画

していただきました。開館後も、生活科学研究科の教員・院生の皆さんと回想法を実施し、ゼミ生の実習として様々な調査を行いました。

もう一つは、豊崎プラザの再生プロジェクトです。これは築後90年の長屋を新しい住まいに甦らせる社会実験で、平成18年から7年の歳月をかけ、退職の年にほぼ完成しました。このプロジェクトは、新設の都市研究プラザの事業に位置付けられ、生活科学研究科の竹原教授など教員・院生・学生の皆さんとチームを組み、とくに学生の現場教育や大学の地域貢献に大きな成果を上げることができました。

最後の数年間は、大阪市大の教員、大阪くらしの今昔館の館長、豊崎プラザのプロジェクトリーダーとして、二足、いや三足のわらじを履いてきました。こうした実践的な研究は、市民が造った大阪市大ならではの研究スタイルであると自負しています。私の教育研究活動に理解と協力をいただいた大学の同僚や学生の皆さんに深く感謝申し上げます。退職後は、大阪くらしの今昔館の館長と豊崎プラザの企画運営に携わっており、これらの施設を市民の生涯学習の拠点に育て上げたいと考えています。



一本の線から

2013年3月退職/現:無有建築工房 代表
竹原 義二

私は、2000年に52才で初めて教員になり、生活科学研究科で、実務経験を生かした建築設計学を教えました。大学で私が教えることは、現役で建築をつかってきた人間として、建築というものが、社会のなかでどのような立場に置かれているのかを見せることです。学生は、実際の建築家のもとで設計デザインを学び、そこから社会との関係を学ぶことで建築の本質にせまります。

授業は黒板授業を基にして講義を組み立てました。水曜日の朝8時前、黒板の前に立ち、1本のドロワーの線を契機にし、一面にスケッチ画で埋め尽くしていきます。静かな教室にチョークの音が響き渡り、1限目が始まるころには黒板全面にスケッチが描かれています。そのころには教室は熱気にあふれ、学生たちは黒板のスケッチを自分流にノートに写していきます。その日のテーマについて言葉を発し出すと、授業の始まりです。黒板

の横に写し出された一枚の写真を見ながら、すでに描かれた黒板のドロワーのうしろに、新たに言葉や図面を描き込んでいきます。ひとつひとつの写真や図面を見ながら、私だけがしゃべるのではなく、学生に問いかけていきながら、授業は進んでいきます。重ね合わされる黒板のドロワーと言葉の連鎖によって場の緊張感とはとぎれることなく、教室中が熱気に包まれます。そのとき理解できなくても社会に出たときに理解できることを期待して、建築を熱く語りました。

教室のなかでの授業だけではなく、学外でのフィールドワークにも重点を置き、現実に建築をつくり上げて行く作業を学生とともに行いました。梅田に近い豊崎に建つ、100年前の木造賃貸長屋の改修工事を通して、学生が“ほんまもん”に触れる実践的な建築教育を行いました。2005年の調査から始まり、現在もまだリノベーション工事が続行し、ここに携わった学生たちが、その長屋に住み、住み継ぐという住まい方を実践しています。13年間の教師生活でしたが、リアリティを持って学生と議論したことは、大きな収穫でした。

SPECIAL 退官教員思い出 2

— 退官された教員の方に思い出を語っていただきました



卒業生に支えられる日々

2012年3月退職/現: 関西大学人間健康学部

山縣 文治

1974年、家政学部社会福祉学科入学。1982年、生活科学部助手。通算38年、教員30年間、市大で育てていただき、2012年ようやく卒業することができました。現在は、関西大学人間健康学部でお世話になっています。とはいっても、場所は南海高野線浅香山駅まで、市大からの直線距離は1キロ強、お互いに高いところに登ると、キャンパスが見える位置にあります。

私が市大に入学した頃は、まだ大学紛争が続いている状況でした。幸か不幸か、定期試験はほとんどなく、バリケードを横目でみる学生生活。教員になると、今度はバリケードと直接向き合う生活となり、その際に痛めた左

耳は、今でも聞こえにくい状況です。

波乱にとんだ市大生活でしたが、そこで教わった、相手の気持ち、立場にたって話を聞くという姿勢は、その後の私の研究や教育に大いに役立っています。また、その過程では、学生に支えられて育てられたと感じる部分が多くあります。

卒業生の方が、公務員として、社協職員として、福祉施設や病院の職員として、今でも多く働いておられます。私も、時間があれば職場にできるだけ顔を出すようにしているのですが、一方で、研修会や会議の会場にわざわざ足を運んでくださる方もいらっしゃいます。それぞれが、与えられた仕事をしっかりとこなしておられる姿に出会えることは、私にとって、大きな喜びであり、教員をしていて本当によかったと思うことのできる瞬間です。

ますますのご活躍を期待します。

2013 ニュースレター発行に寄せて…



近況報告

2011年3月退職/現: 桜美林大学大学院老年学研究科

白澤 政和

大阪市立大学を退職して、桜美林大学大学院老年学研究科で教鞭を取るようになって2年半になります。学生時代から数えると約45年です。人生のほとんどを市大にお世話になったこととなります。多くの皆さんに支えられての、楽しくかつ充実した市大での生活でした。多くの皆さんに心から感謝申し上げる次第です。

現在所属する「老年学」とは、高齢者や高齢社会をフィールドにして、自然科学・社会科学・人文科学の研究者で学際的に研究・教育を行うことです。アメリカでは100以上の「老年学(gerontology)」の学部や学科があるようです。桜美林大学は、社会人中心の大学院で、日本では唯一の老年学の研究科であります。常勤では私の社会福祉学が加わり、医学、精神医学、公衆衛生、心理学、社会学といった領域の教員と、非常勤では、看護学、経済学、建築学、法学、リハビリテーション学の領域の教員と一緒に、大学院生の教育を行っています。私も、現在後期課程の学生を3名、前期課程の学生を9名指導しています。

一方、大阪では上本町6丁目に事務所をもち、東京、大阪、三重の自宅を起点に

して、うろろろしています。桜美林大学の講義は2週間に1回2コマと、少なくとも助かっていますが、市大当時から東京との行き来が多かったのですが、今もその生活は継続中です。いくつかの役職についてリタイアできたかと思えば、また新しい役職を依頼され、未だ静かな生活が送れていません。

大学は東京のと真ん中の四谷駅近くにあり、至極便利ですが、杉本町とは違い飲み屋街です。東京ではホテル住まいということもあり、酒量は増えました。それで、先月から大阪にいるときにはジム通いをし、筋トレやウォーキングを始めましたが、未だその成果は出ていません。

大阪市立大学の今後について巷で話題になることもありますが、「ピンチはチャンス」という思いで、新たな展望を切り開いていただきたいと願っています。その意味では、私の市大当時から変わらない気の向くままの生活を続けていることは申し訳ないという思いで一杯ですが、これは星のめぐり合わせによるものと、ご容赦ください。

NEWS おしらせ

退職者

山縣文治先生(2012年3月)
田中佑香先生(2012年3月)
曾根良昭先生(2013年3月)
西成勝好先生(2013年3月)
百木和先生(2013年3月)
谷直樹先生(2013年3月)
竹原義二先生(2013年3月)
井川憲男先生(2013年3月)

計報

三平和雄先生
(2013年5月31日)

着任教員

安井洋子先生(2013年4月)
ファーナムクレイグ先生
(2013年4月)
福田美穂先生(2013年4月)
野村恭代先生(2013年4月)
加藤久美子先生(2013年4月)
林史和先生(2013年4月)
細田耕平先生(2013年4月)
森本佳子先生(2013年4月)
山本静香先生(2013年4月)
中島尚美先生(2013年4月)



2012年6月29日に生活科学部北側に大学の新たな顔となる南都ストリートができました。

EDITORIAL NOTE 編集後記

2005年3月、同窓会活動も含め本学全体の支援組織として新に設立された学友会は、2012年6月に教育支援組織と改組され、同年11月3日Home Coming Dayには、大学支援組織の一つとして大阪市立大学同窓会(児玉隆夫会長)が設立されました。

こうした中、大阪府立大学との合併について検討が進められ、「新大学構想」が公表されました。統合により2万人を擁する公立総合大学となり、規模も然ることながら知的社会資本として位置づけられています。両大学の伝統と業績の活用を重視しつつ、自治体との連携や教育

行政への貢献、実践研究等公立大学としての役割をもって大阪への貢献を果たすものとされています。

さて、平成23・24年度、研究科では長年、研究教育に貢献されました4人の教授が退官されました。人々の暮らしの中にある事象を研究テーマとする全国でも数少ない教育・研究を誇る生活科学部・研究科は、先達の研究功績を受け継ぎ、新たな環境に向けさらなる発展をめざし、相互理解のもと歩んでまいります。同窓会活動にも変わらずのご支援をいただきますようお願い申し上げます。

同窓会役員 春木 敏